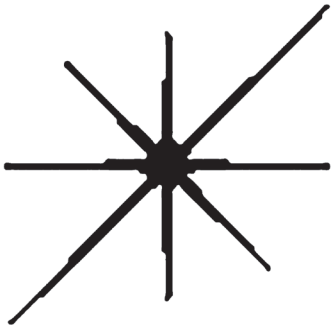
コメット通信 16

［’21 年 11 月号特別付録］



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

物語の余熱（8）
――「ブラック・ノート」抄

中村邦生

44　作品が私たちを選び，私たちを読む

（40 冊目，1 ページ）

私に幻聴などといった経験は，記憶する限りないとはいえ，不意に発した一つの呟きが自分の声なのか他人の声なのか，出所不明のまま宙づり状態の気分で，妄念に入りこむことはよくある。自分自身のなかに伏在する他者の声の正体にこだわるとなれば，自分の声もまた「引用の織物」などという洒落た言い方には程遠いにせよ，綾地の重なるテキスタイルの糸口を見つけて，ほどいてみたくなるような気分に浸ったりするのだ。

どういうことか？「私たちが作品を選び読むのではなく，作品の方が私たちを選び，私たちを読むのだ」という一文が口から洩れ，それは私自身の思念なのか，それとも他に典拠を持つ言葉なのか遅疑していると，まさしくそのような惑いを遠ざけてしまう例言が現われた。

> 私たちに視線を向け，私たちを見つめ，私たちを夢想して，私たちのことを考えているもの，それがモノ（object）である……。モノは，そのシステム，その悪ふざけ，そのよそよそしさ（異物性），その消滅，さらにはその内在性を通じて，あらゆる力を行使しているのではないだろうか？
> （アンヌ・ソヴァージョ著／ジャン・ボードリヤール写真『ボードリヤールとモノへの情熱――現代思想の写真論』塚原史訳，人文書院）

貸出ノートを調べたが，この本の記載はなかった。乱雑に積み重なった本の山のどこかに，現物があるかもしれないと探してみたが，すぐに根気がなくなった。代わりに現われたのが，イタリアの作家で古書コレクターであるアンドレーア・ケルバーケル著『小さな本の数奇な運命』（望月紀子訳，晶文社）という本だ。ある作家の一冊の本が，およそ 60 年に及ぶ自らの人生を回想する。最初の 17 歳の読者に始まり，持ち主から持ち主への波乱な変遷をへて，今は古書店の売れ残りの棚で新たな買い手を待っている。段ボール生活を 1 年ほど経験して，晴れの舞台なのだが，ヴァカンスまでに売れないと廃棄処分になる。客の視線が近づいては他の本に移っていく。「このむなぐるしいまでの期待感。まるで病気だ。ここに並べられてもう 2 週間になるのに，客の顔が近づくたびに，どきどきする」と読者の動きを見つめ，その意図を探る。

読者を待つ受け身の態度にも思えるが，むしろ本の方こそが自らの声に呼応する読者を選んでいると感じられる。だとすれば，書庫のなかでこの本に遭遇したこと，つまりは私を待ち伏せしていたかのような現われ方は，何か意味ありげな事態に思える。

先の引用文に戻れば，「ブラック・ノート」の最終 40 冊目の 1 ページに置かれていることが気になる。冒頭の 1 の「アフォリズム的な断章」で示したように，同じく最終ノートの末尾に記された文章と照応関係を持つように思えるからだ。「作中人物もまた作品の外の音に耳を澄ましているのだ。（……）読者の心中の声すら聞こえるときがあるぐらいだ」と。ただしその折に，そう易々と私の「心中の声」など判るはずがないとも記した。それは今でも変らないと言いたいところだが，何やら昏惑の心持ち

を曳き，自分で自分を謀(たばか)る錯雑とした気分がのぞく。すると，この「謀る」という瞬時の心理的な揺れに反応して，ミステリアスな出来事を伝える文が現われた。

45 「ロンドン・バークリー・スクウェアーにて」

（39 冊目，8 － 15 ページ）

なぜこの文が私を待ち構えていたのか，皮肉なような嫌味のような思いを抱きつつも，書かれている事件の顛末とは裏腹に，笑話のような印象を持つのだ。

写真集のコレクションを持つ旧知の古書店マッグス・ブロス（19 世紀半ばの創業）が数年前に転居したと聞いたので，そこに行く前にまず旧店舗はどうなったのかと，グリーンパーク駅から徒歩 10 分，バークリー・スクウェアー 50 番地のビルを訪ねることにした。幽霊話が多いロンドン市中にあって，もっともよく知られた曰く付きの建物だ。私はとりたてて幽霊に関心があったわけではないが，懐かしさに心誘われて立ち寄ることにした。小さな公園の前だが，木立が斑の影を作っていて，必ずしも人通りの多い一角ではない。

時刻は黄昏の近づく午後 3 時半頃だったろうか。旧店舗ビルの写真を何枚か撮り終ったころ，グレーのコートにソフト帽をかぶった中年の白人の男がにこやかに近づいてきて，道路の反対側の公園を指さし，写真を撮ってほしいと頼んできた。駐車した車の間を抜けて道を渡り，木立の囲む公園を背景に一枚，場所を移動してもう一枚撮ろうとしたとき，同じような年恰好の女が現われ，カップルの写真となって収まった。

直後，女が小さく叫び声を洩らし，私の背後で威圧的な足音がした。30 代半ばと 20 代後半くらいの二人の男が近づいてきながら，首から下げた身分証明カードを見せ，警察官を名乗り，コカインの摘発の特別ミッションで捜査中だと言った。公園の向かいのアパートを指さし，たった今コカイン取引の現場を押さえたところだという。

制服は黒ではなく，ベレー帽に水色の縦縞のある灰色のジャケット。軍服姿に似ていて，いかにも特殊な捜査隊を思わせた。二人の白人警察官は，南欧系あるいは北アフリカの出身のような風貌で，その英語はイギリス人とは異なるが，とくに聞き取りにくいものではなく，むしろ分かりやすかった。

「パスポートを見せろ」

「私はコカインなど持っていない」

「いいからバッグを開けろ」

そんなやり取りがあって，ソフト帽の男は，おびえた様子で警察官たちの指示に従った。

私もパスポートを渡し，バッグの中身の点検に応じた。コカインは本当に持っていないか，と繰り返し尋問する。

「もっと本人確認が必要なので，クレジット・カードを 2 枚見せろ」

私は普段使っているセゾンカード VISA とほとんど使わない JCB を見せた。年長の方の警察官が，それらをしげしげと確かめた。

「ジャパンマネーはあるか？　ニセ札が多いので確かめる」

同じ警察官が重ねて言う。私が日本円を入れた財布を開けると，警官は紙幣をつかみ，陽にかざしてから，無造作な手つきでカードと一緒に戻した。だが，このときの手品のような指の動き

が一瞬気になったが，緊張のあまり，はっきり記憶できていない。
「本当にコカインは持っていないか？」
　と若い方が執拗にきく。年長の警察官は暗証番号打ち込み機を差し出し，新たな要求をしてきた。
「カードのピンコードをここに打ち込め」
「ピンコード？　どうして？」
「もっと詳しく本人確認をするためだ」
「それなら，ポリス・ステーションに行って，そこであなた方の話を聞きたい」
「われわれを疑うのか？」
　と二人は口々に言い，道路の反対側の歩道で携帯電話をいじっている男に，胸から下げたIDカードを大げさに示し，「これはメトロポリタン警察の身分証明か」と尋ねた。聞かれた男は，「イエス」と頷いた。
　それでも私はピンコードを押すことをためらったのだが，警察の要求を拒むと面倒なことになると不安に駆られながら，それでもおそるおそる嘘の番号を打ち込んだ。すると警察官の声に凄みが加わり，強い詰問の口調になった。
「いま，お前はわざと間違ったピンコードを押したな？」（「わざと」on purpose が大声になった）
　なぜ嘘の番号が知られたのか，わからない。かまをかけたのかもしれない。続けてこう言った。
「警察を欺くと fatal な結果となる。そこの車の中で，さらに検査をするから来い」
　警察官を名乗る二人の男は，私の両腕を摑み，車に引きずって行こうとする。私は恐怖で体がこわばった。警察官がたかだかこの程度の尋問で fatal（命に係わる）という言葉を使うわけがない。明らかにニセ警官だったとこの段階でわかった。
　車の中にはもう一人運転手役の男の気配もある。もし車の中に連れ込まれたら，身ぐるみ剥がされるだけでは済まず，わけのわからない注射を打たれ，ロンドン郊外の空き地に死体となって放置されることになるかもしれない。そして，「日本人行方不明」のニュース記事が小さく出るだろう。
　もちろん，このときにそんな最終的な光景が生々しく浮かんだわけではない。ただ恐怖心で，車の中に拉致される危険から逃れたいという必死な思いがあるだけだった。
　私は二人の男に言った。
「ピンコードをもう一度押し直すので，ちょっと待ってくれ」
　私の腕をつかむ男たちの腕が緩んだ。そして私は助かりたい一心で正しいピンコードを押した。このとき男たちが何か言ったようだが，覚えてはいない。
　私は解放されたのだが，最後にまた「コカインに気をつけろ」とニセ警察官はもっともらしく捨て台詞を吐いたが，「ふざけるな！」（Don’t be silly!）と叫びたい気持ちだった。振り返りながら，こいつらの写真を撮っておこうかとも頭をかすめたが，新たな危険を招くかもしれないと，小走りで現場を立ち去った。そして気持ちを落ち着けて財布を確かめると，セゾン VISA カード一枚と日本円の一万円紙幣が 5 枚抜き取られていたことに気づいた。
　最初の紳士風の男も，通りすがりの男もすべてニセ警官の仲間で，周到に仕組んだ犯罪計画で，同じ仲間だったのだ。しかし登場してすぐに姿を消した女性の正体はよく判らない。思い出せば，ややメンタルなハンディキャップを持った人のような印象もあるが，曖昧なままだ。ことによると建物に棲みついていたゴーストだったのではないかと昏迷した気分におそわれる。
　Wi-Fi の受信できる場所を探したり，携帯電話の通信状態や，緊急連絡の電話番号が繋がらな

かったり，繋がっても通話できなかったり，あれこれ手間取っているうちに，2 時間後にようやく連絡が取れたときには，すでに引き出し限度までローン扱いで現金が引き出されていた。400 ポンドが 4 回，500 ポンドが 2 回の合計 2600 ポンド。

以上の事件内容を警察に連絡した結果，ロンドン・メトロポリタン警察から，朝の 8 時半に宿泊先へ女性警官が現われ，事件の詳細を確認し，調書を取った。これは前例にないプロットとディレクションを持つ犯罪との説明で，防犯カメラのない地区を周到にねらったものだと言った。そして当該事件に正式な捜査番号が付けられたのだが，今後犯人が逮捕された場合，裁判に出廷して証言をする気はあるかと尋ねられた。わざわざそのためにロンドンに来る気はないと答えた。いずれにせよ捜査が進展したならば，報告をするという。だが，まだ犯人らしき人物が捕まったという知らせはない。

〈寸感〉

ここで終わっている文なのであるが，これに続くメモ風の記述を示さなければならない。笑い話のような事実だが，この文章は私自身がロンドンでの体験を書いたものである。先に「ミステリアスな出来事を伝える文」と述べたが，それは「事件」の内容もさることながら，「ブラック・ノート」にこれが紛れ込んでいるミステリーにある。廃棄された文章の亡所として，ここに繋留されても不思議ではないにせよ，これは公に書いたものではなく，カード会社との交渉用に走り書きした 2018 年 3 月 17 日の事件のドキュメントであり，何度かの遣り取りで被害金額は支払い免除となった。したがって，用済みになった後はその所在を忘れさえしていた文書なのである。いったいどこにあったのか見当がつかない。「プロムナード・コンサート」（40）のような虚実の反転した「ブラック・ノート」への紛れ方とはまた別の形で，少し愉快でもある幻惑を覚える。

後に続くカットされた文とは，どのような意図か判断がつかないが，いわゆる〈見せ消(けち)地〉の扱いで大きく×の線が引いてある。

思い起こすたびに緊張が甦るが，2600 ポンドで命を拾ったのかもしれない。ロンドンで身をもって小説用のエピソードを入手したとも考えたい。さて，どうなるか，創作的な思考に入ると，何よりも事実の細部の正確な復元が最優先で，それがないと何一つ始まらない気がする。その確認に区切りがついて初めて，すべてがもはや他人事のような境地になり，気分が創作的な転換へと向かう。

×の斜線があれば，否が応でも目立つことになる。「忘れていることがありはしないか」と，私の心の空隙を衝いてきたかのようだ。しかし，有難くもない鬱陶しい思いを呼び起こすことも確かだ。「事実の細部」とまでは言えないものの，事後処理は円滑に進んだ。この点，ロンドンで合流した T の判断と行動には大いに助けられた。手間取ったカード会社への連絡は，その日の夜に会食の約束があった R 大学の H 教授へ電話相談，ブリティッシュ・ライブラリーのカウンター係員の助言など，最低限の対応はできた。警察への連絡もその日の夜に，T がロンドン警視庁のホームページから被害報告の可能な相談フォームを見つけ，上記の事件経過を英語に翻訳し送信した。結果として，メトロポリタン警察からの連絡を得ることができた。

「小説用」としてメモ書きした項目を思い出してきた。古書店マッグス・ブロスの入っていた建物は，19 世紀中ごろ，上階に住んでいた 30 代の女性が投身自殺し，亡霊の出没するロンドンでも名の知れ

た haunted house となったこと。したがって，事件でソフト帽の男の脇に立つどこからともなく現われた女性は，確かにこの建物に住み着く亡霊だったのだと思う。もし男が後に携帯電話で撮った写真を見るとすれば，見知らぬ女がカップルとして映っており，さぞかし驚愕するであろう。マッグス・ブロス書店の競売に出した有名な商品の一つに，ナポレオンのドライ・ペニスがある。入手経路は秘密だったが，乾燥状態とはいえ，思いのほか小ぶりだったらしい。これは，人から人へ渡りウィンストン・チャーチルが海軍大臣時代に入手したという噂もあった。

46 「梢の風が吹いて」

（32 冊目，1 － 3 ページ）

40 の「プロムナード・コンサート」の「付記」に現われた笠間の姪 J（今は音楽雑誌の編集者のようだ）が書いた，大学時代の S 先生をめぐる回想文らしい。なぜこの文からの呼びかけがあったのか，必ずしも整理された考えに到ってないのだが，ことによると「ブラック・ノート」の出自に関与する可能性もないことはないだろう。

「梢の風が吹いて」

梢がしなって白い葉裏がのぞき，木立のなかにこもる暗がりがくずれた。一瞬，木の奥から初秋の空へ小鳥の飛び出していく気配があったが，枝の揺れはすぐに静まった。

7 号館の演習室の窓の近くに，大きな葉を密集させた朴の木が枝を伸ばしている。

「梢の風がとおっていったね」

と S 先生は授業を中断し，私の窓の外への視線を辿りなおして呟いた。前にも先生が口にしたことのある言葉で，枝葉を吹きならして過ぎる風のことを指すらしい。

「ちょっと休憩して，みんなで木を眺めようか」

唐突な提案に，ゼミの仲間たちに笑いが起こった。私の隣の M 子が窓側の席に移動したのに促され，皆は窓に向かって姿勢をかえた。

S 先生は教卓に肘をつき，物思いにふけったように窓の外を眺めていた。

「ぼくもけっこう好きです。風にそよぐ木の葉を眺めているのは」

後ろの席から文具メーカーの仕事が内定したばかりの H 君の声がした。私たちの間から何も意見が出なくなると，先生はいつも H 君を指名して，沈黙した教室の空気の入れ換えにかかる。

「木と同時に，私は梢を揺らす風を眺めているんです」

と先生はいつもと違った調子で応じたので，私は顔を上げ，改めて窓の外に目をやった。

少し間があって，S 先生は写真家の親友の話に触れた。カナダに行ったまま長いこと消息を絶っているという。「大学 3 年生のときに，彼はわけあって警察に勾留されたことがあるんだけど，そのあと一緒に裏磐梯へ旅したことがあってね。その時あいつ，ぽつりとこう言ったんだ。『湖の水面をわたっていく波紋は，水の模様なのかな，それとも風の模様なのかな』って。私がなんと答えたか，まったく覚えてないけど，どちらだろうね。波の紋は，水のものか，風のものか。今なら，風の作る模様だと言うかもしれない」

話はそこで止まった。S 先生は立ち上がり，ホワイトボードの字を消しながら，休憩前のレクチャーを復唱した。青年および青春という概念や現象の発生は，近代社会のブルジョア階級の勃興と連動したもので，しかも男子の特権だった……。

ふたたび教卓に戻った先生は，小説家でもあるのでときどき起こる事態なのだが，不意に記憶

が甦り，発想が動きだしたらしく，ゆっくりした口調で湧きだしたばかりのアイディアを話しはじめた。定番の授業メニューよりも物語の萌芽を聞くほうが，想像を刺戟して私は好きだった。

――あるとき写真家の親友が，段ボール箱に詰められた黒いノートを旅先から大量に送ってきた。消印はパタゴニアの世界最南端の町ウスアイア。追加の段ボール箱も，沖縄から送られてくる。ノートは総計 40 冊，長短の入り混じった創作的な断章が書き込まれ，読んで随意に使ってもいいし，無用ならば直ちに処分してほしいという趣旨の手紙も添えてあった。

S 先生は着想の動くままに，黒いノートの断章群のプロットの紹介を始めた。まるで車窓から移り行く風景を眺めるように話が続き，何日も長距離列車に乗っているような気分だった。実際に，長い日数が過ぎたのかもしれない。

M 子が気に入ったのは，ハズキちゃんという小学 1 年生の子のお父さんが，保護者会の活動で，子どもたちに語った「世界一長い話」という怪蛇ウロボロスのイメージを模した話だった。H 君が，心ひかれたのは，『土佐日記』の紀貫之の旅を平安から現代に移し替えて，原作と同じ女性の語りで記すトラベル・ライティングだった。私が興味を覚えたのは，「北緯 39 度，花巻」という話で，宮沢賢治の故郷を起点に，この緯度の土地を西へ西へと移動し，東北地方から日本海，中国大陸のゴビ砂漠，カスピ海，マドリード，大西洋，ニューヨーク，シカゴ，太平洋，そして花巻に戻る……と地球を一周する幻想譚だった。それと，思わず微笑んでしまう短いアフォリズム風の一文の紹介もあり，誰の言葉か聞きそびれたが，「エゴイストとは，私のことを考えてくれない人のことである」など頷けるものがあった。

その日の授業は，皆で S 先生の長い夢想の旅に同行したことになる。

小梨の木だろうか，夕暮れの逆光の中で樹影が細く歩道に伸びていた。私はバス停に向かう坂道を上りながら，S 先生の話は，きっと笠間叔父さんが関心を示すだろうなと思った。先生の友人と同じ写真家で，世界を放浪し，書くことが好きでノートを持ち歩いていることも似ている。こうした話の数々はいったん聞くと誰かに言いたくなり，伝播力がある。好奇心の強い叔父の性向からすれば，ノートを一式借り出したいと頼んでくる可能性も大いにあるだろう。一方で，ノートなど実在せず，S 先生の思い潜めた心に梢の風が運んできた，束の間の物語だったような気もする。

〈寸感〉

笠間保の姪による文の転写だという。ここに書かれていることから判断する限り，S 先生の元に届いた黒いノートを笠間が借り受けて「ブラック・ノート」にしたか，少なくとも文章のいくつかは借用したものという可能性がある。それならば，作者の複数性に関して幻惑的な事態が重なることになるだろう。しかし私としては，最後に記されているように，ひととき風が運んできた S 先生の想像の所産と考えるほうに加担したい。

47　古文書を発掘した

ある日，取り立てて特別な目的があったわけではないが，「ブラック・ノート」全冊をこれまでのように段ボール箱に収納するのではなく，机の背後の書棚に並べた。するとパソコンの電源を切ったとき，画面の奥に四角の横穴が見えた。頭の背後に黒い矩形の洞窟の口が開いているのだ。

数日後，気になるのでノートは元の段ボール箱に戻した。その折に，古文書を発掘したのである。

発掘というよりも，たまたま見つかったわけなので，遭遇と言うべきかもしれない。ただし，私自身がかつて書いたと覚しき，忘却の淵に沈んでしまっていた古い文書である。

私の場合，単行本に収録したものは別として，あちこちに書き散らした文をきちんと整理もせずに，成り行き任せに放置し，書いたこと自体も忘れたままのことが多い。部屋は古い書類やコピーなどの紙類，何が入っているか判らない段ボール，それらに書籍や雑誌が未整理のまま重なり合い，鬱屈した気分を引きずりながら，混乱はいつまでも続いている。

寄贈を受けた本だけでなく，演奏会チラシの間から，1 年も前の私信が未開封のまま出てきたときには，さすがに気分が落ち込んだ。「いちいち気にせずに不義理を覚悟して過ごさないと，狂気に陥る」と言った人がいるが，何の人生訓にもならなかった。

私は 2012 年までワープロ〈NEC 文豪〉を使っていた。したがって，それ以前に書いた文章は，フロッピーの磁気が飛んで復元できないし，原稿の掲載紙などは散逸しているので思い出せない。そのような中で，意想外の「発掘」があったのだ。

深夜，「ブラック・ノート」を段ボール箱に戻すとき，脚ばかり長い小さな赤い蜘蛛が『日本異界絵巻』という本の上にいたので，朝逃がして吉兆となるように捕まえにかかった。だが，書棚をふさぐ本の山の間に入り込んでしまった。本と本の隙間に紙がはさまっている。引っ張り出すと，20 年前に出した評論集のパブリシティ用の文だった。書肆の依頼で書いたものだが，宣伝文にはなっておらず，もう一つ批評文を書いたような仕儀で，使われずに終わったのだと思う。

虚言について生真面目に書いていることが可笑しい。タイトルは「フィクションの愉しみ」というあっさりしたもので，以下がその文である。

> 常日頃から「好き嫌い」を物事の判断基準にしているわけではないし，今ここで大仰に公言するほどのことでもないが，私は嘘つきが大嫌いである。たぶん嘘つきも私のことを嫌っているであろうから，長年にわたり，互いに確執を続け，今日に到っているわけだ。
>
> 威張っている人間も私は嫌いだが，こちらは愛敬のある場合も多い。何年も前に，私よりも一回り年若い文芸評論家が，威張ったような断定口調で，拙作を論じて「こうした最近の若い小説家は，……云々」と書いてあった。この一文を目にしたときは，実に愉快で，何やら得をしたような気分になったほどだ。しかし，嘘つきにはどうしても寛容になれない。
>
> そんな私がなぜ〈虚言〉なる語をタイトルに持つ本を刊行するのか。理由はいたって明快である。嘘をこよなく愛しているからだ。ただし，嘘つきの吐く〈虚言〉ではない。嘘つきというものは，そもそも嘘を愚弄している人間だ。嘘に敬意を欠いている。それだからこそ，軽々しく嘘がつけるのだ。「嘘も方便」という人生処方を私も認めないこともない。切羽詰まった局面で，真実を伝えることが地獄を招き，嘘をとおすことが天国を守るのであるならば。
>
> しかし，〈虚言〉を日常の破れ目を糊塗する「方便」に貶めてはいけない。〈虚言〉＝フィクションは，愛らしくも荘厳な，ときに戦慄に満ちた恐怖で魂を凍りつかせ，しかし何よりも愉しみ溢れる人間的営みなのだ。そこには巧緻であれ，大胆であれ，さり気なくであれ，魅力的な工夫（たくらみ）が凝らしてある。そうしたもの（すなわち文学）がこの世に存在する嬉しさは格別なはずだ。ここにあるのはその嬉しさを熱くかつ静かに伝えようとする批評的試みである。
>
> ふっくらしていて，豊かな，それでいて油断のならない緊迫した空気の漂う〈虚言〉＝フィクション。それぞれ固有の魅力を放つフィクションへの敬意の表し方として，ここではさまざまな批評スタイルを用いている。小説の方略の愉しさを対象への擬態批評によってパロディ風に論じ

たり，「嘘」をめぐるエピソードを引用の問題に転用したり，錯覚や偽装をもたらす措辞の仕組みをテキストの手触りを頼りにイメージ論的に読解したり，批評的パフォーマンスとして，いずれの試みも〈虚〉は〈実〉を含む。とりもなおさず，それこそが文学の魅力の一端を伝える方途と信じている。

文学的虚構（フィクション）は，人生万般で口にされる「役立つ・役に立たない」の性急な二分的発想を突き崩すものだ。それゆえにこそ，文学は私たちの〈生〉の奥行を広げる契機を作るであろう。

折り重なって，もう一部原稿のコピーが出てきた。どこに何のために書いたのか，すっかり失念しているが，これもまた〈虚言〉をめぐる文で，ある哲学者のエピソードとともに記している。タイトルは「夕映えのなかの哲学者」となっている。

ガルシア＝マルケスが『パリ・レヴュー』誌のインタヴューのなかで，ふと口にした言葉がある。〈パブロ・ネルーダの詩に，うたうときに，わたしがでっち上げをやらないように，神よ，守ってください，という一節があるよ。〉

「でっち上げか……」と私は何やら不穏な言葉に出会ったかのように心がゆれた。奇想と大ほら話がむせ返るような熱気の中で奔放な語りのエネルギーを放つ，そんな小説の書き手であるガルシア＝マルケスが，ことさら「でっち上げ」の戒めについて引証するとは意外な感がある。何しろ，殺された男の血が家を一周して街へ流れていったり，200 歳をこえる牛の姿の独裁者が無理難題を突きつけたり，悪魔の与えた巨大な男根を持つ男や空中浮遊を行う神父たちの跋扈する話が，カリブの現実からすれば，「でっち上げ」とは関係ないと述べるのであるから。しかし，この発言にひそむ巧妙な韜晦，あるいは真摯きわまる企みの妙趣をあれこれ推考してみたい誘惑にかられるものの，いまはそこへ立ち入らない。

パブロ・ネルーダ。ガルシア＝マルケスのインタヴューに現われたこのチリの詩人の名前が連想を呼び，私はある哲学者を思いだした。ほとんど表情を崩さない端正な面長の顔が記憶の奥に浮かぶ。この顔に魅了されたスイス生まれの彫刻家は，パリのアトリエで何カ月ものあいだ休むことなく，デッサンを続けた。おびただしい数の「イサク・ヤナイハラ像」が描かれ，廃棄され，描かれ，廃棄された。

稀有な造形的現場に臨み，このモデル体験をつぶさに記録した思索の書『ジャコメッティとともに』のなかで，哲学者ヤナイハラが「見えるものを見えるとおりに描くこと，言い換えれば，存在にまつわりつく空虚を描き，空虚を描くことによってそこにあるものを出現せしめること」と記した試みだ。彫刻家は対象の出現と消滅が同時的に起こる存在の究極的な明視に到り着きたいのだ。

顔を凝視するデッサンの孤独な格闘は，毎日深夜にまでおよぶ。ときに顔の起伏が砂漠のように広がり，彫刻家は煩悶する。アトリエを覗きに来たジャン・ジュネは，ポーズを崩すまいと握手の手も出さない哲学者の横で，「何という情熱」と嘆息する。

哲学者はネルーダの代表作『マチュ・ピチュの高み』の翻訳を 1987 年に刊行した。竹久野生（たけひさのぶ）の挿画の入った日本語訳の美装本。インカの廃墟の土と石の感触を魅力的に伝える竹久の絵について，哲学者は解説のなかで偶然にもガルシア＝マルケスの言葉を援用し，こう述べている。

――ガルシア＝マルケスが“ここではシュールリアリズムが洋服を着て歩いている”と語った

都市ボコダで彼女が吸収したもの，アンデスの山中の石の言葉が沈殿し化石となったものが散りばめられている。

なぜネルーダなのか。「孤絶の地の廃墟」と「石の沈黙」の中へ消えた死者たち，「その人々への共感によって詩人は現在と過去のあいだを往復し，死者を蘇らせ，抑圧のもとで喘ぐ全世界の民衆に死者からのメッセージを伝える」と哲学者はネルーダへの思いを伝えている。

詩人は歌う，「まばゆく拡がる光彩の奥／この石の夜の奥底に　わたしの手を沈めさせよ」。そしてとりわけ次の詩句に私の記憶が動く。「生者　死者　黙(もだ)す者　耐えている者　これらすべての者の手のなかに　コップのように都市がたちあらわれた」。

「まばゆく拡がる光彩」と「コップ」の詩句が，文脈を離れて，私の記憶の奥へと漂いだす。だが，どこへ向かって？

『マチュ・ピチュの高み』には，別巻としてネルーダ自身によるスペイン語の原詩の朗読と訳者の朗読テープがついている。再生してみると，磁気カセットテープはいずれも経年劣化で，声が異様に間延びし，途切れ，不快なノイズ化した声音が聞こえるだけだ。それでも，哲学者の謡曲で鍛えた低い声の記憶に行きつく。フラットな，ときにくぐもったように響く低い声を私はとりたてて好きとは言い難いものがあったが，ふいに懐かしさがこみあげた。それでも，この声からは私がぜひとも甦らせたいイメージには辿りつかない。それを語るためには，ある場所をめぐる道筋をふたたび辿らなければならないであろう。

その場所では二つの太陽が現われる。

新宿西口超高層ビル街。ここで経験したいくつかのエピソードがあり，とくに夕暮れどきの話はすでに書いてきた。

新宿三井ビルの壁面は反射ガラスが使われていて，ビル全体が巨大な鏡のように見える。冷ややかな翳が街を浸しはじめる黄昏の時間になると，鏡面に日没の太陽が映し出されて，通りは奇妙な明るさに充たされるのだ。議事堂通りのプラタナスの街路樹の根元にわずかに残る土に，野芥子(のげし)が黄色の花を咲かせ，くびれた葉を伸ばしているが，その花影も日没の自然光と三井ビルの壁面の反射光によって二つできる。

ある夏の終わりの夕暮，私は会合の予定されたホテルに向かって，住友ビルの前を歩いていた。やや時間に余裕があったので，広場のベンチに座り，買ったばかりのレコード雑誌を開くと，背後から「ほら，かわいいよ」という幼子の声が聞こえた。振り向くと，街路表示板の下で，5，6歳の少女がしゃがんで何かを見つめ，母親も一緒にのぞきこんでいる。

親子が立ち去ったあと，私は確かめに行った。案内板の支柱の脇に，ボールペンの長さくらいの草が一本生え，白い花をつけている。大匙で山盛り一杯ほどの，砂塵まじりの土くれを頼りに，ニラが枝葉を伸ばしていた。枝の先に糸くずを絡めたような花を載せ，微風にゆれている。

私はざわめきの増した街路に目を移した。ビルの谷間が異様に明るい。この場所に二つの太陽が現われることを，このときあらためて実感した。鏡面ガラスを張った三井ビルの壁に夕陽が当たり，あたかももう一つ太陽が生まれたかのように，強い陽射しを街路に放つ。氾濫する夕陽に身を沈めると，光に酔い，昂揚感が身体全体に広がる。ここに溢れるのは自然光なのか人工光なのか。たぶん，そのいずれでもあり，いずれでもない。自然と反自然という図式的認識の対置は，ほとんど何の意味もなさない。自然＝本物と人工＝嘘という並列的な認識の構図は，胡乱で粗雑な思考が吐かせる言葉にすぎないのだ。

この街には，コップのなかに富士山があらわれる場所もある。

新宿三井ビルの鏡面の壁の上部に映った富士山が，街路を挟んだ向かい側の京王プラザホテル1階ティーラウンジの窓ガラスを突き抜け，テーブルの上のコップの水面まで届く席があるのだ。

ある5月の夕刻，私は京王プラザホテルのティーラウンジの西端の窓側の席に座った。三井ビルの壁面の反射ガラスに映っている富士山の位置を慎重に確かめながら，テーブルのコップを少しずつ動かし，微妙な方向に気を配る。そしてコップをやや斜めに傾けてなかを覗く。

それから，何かに耳を澄ますような気持ちの構えで，一心にコップの水を見つめ，銀色のメタルのコースターを底に当てがいながら，やや横に移動する。すると水面のうっすらとした翳は，繊細な光の表情を帯びはじめ，静かに富士山を浮かび上がらせるのだ。

私は深淵に引き寄せられるように，コップの水を覗きこむ。一瞬，水面が震え，光が散る。水面に静寂が戻ると，青白く淡い光のなかに，ふたたび富士山がほのかに現われた。

新宿超高層ビル街の残照の氾濫と鏡面の壁の照り返しが，コップのなかに富士山を届ける。私はかつてこの話をある雑誌に書いたことがある。哲学者への追懐の思いがゆきつくのは，ここからなのである。

確か晩秋の時期だったと思うが，哲学者から電話をもらった。めったにないことで，私は緊張気味にちぐはぐな応対をした記憶がある。

「中村さんは，あの小説をどういうつもりで書いたの？」

電話でも低く抑揚のない声だった。

「おもしろくなかったですか？　もうしわけありません」

「いや，そういうことじゃなくて，あそこに行ってみたんだ」

「お一人で？　誰か一緒だったのですか？」

たまたま遭遇した転形劇場の太田省吾の芝居でも，昭和女子大人見講堂のロス・アンヘレスのリサイタルでも，それぞれに若い女性を同伴していたのだから，とっさとはいえ野暮な質問だった。

「さっちゃんだよ。彼女が，あなたの小説の舞台に行きたいといってね」

「そうだったんですか。よかったですね」

「よかったって，そういうことじゃなくて，私は驚いてしまった」

「どうしたのですか？」

「あなたは，あの話をもちろんフィクションのつもりで書いたのだろうけど，驚いたね。本当に見えたんだ」

「何がですか？」

「だから，ほら，富士山。コップのなかに，見えたんだ。富士というより，形がすこし崩れて，夕焼けのなかに小さな島が漂っている感じだったけれど」

「えっ，ほんとうですか」

「でも，あなたが小説で書いていた席では，見るのは無理だった。西側じゃなくて，東の窓側の席の2列目だよ。いや，おかげで，面白い体験をさせてもらった。さっちゃんも，びっくりしていたよ。ありがとう」

「えー，そうだったのですか。驚いているのは，私のほうですよ。事実は小説より奇なりというのと，ちょっと違うかもしれませんが，とにかく，まあ，フィクションとして書いたことが……」

「中村君，あのね，今の私の話だけど」

哲学者はそう言いかけて，息を切らし，咳こんだ。瞬間，私は事態を了解した。しかし，この

ような場合，虚構のゲームを守ることが暗黙のルールはずだ。

「まさか本当だとは，驚きました」

「今の話ね，私の作り話だよ。引っかかったね」

笑い声とともに電話が切れたのだが，哲学者のフィクションが小説家のフィクションに勝ったと可笑しそうに言ったようにも思うのだが，この記憶は曖昧である。

哲学者は，いわば小説のなかを散歩して，内部から虚実を反転させたのだと思う。

コップの残光に浮かぶ富士山を見つめたあと，街路にあふれる夕陽に身をひたしながら歩く，哲学者の後ろ姿がいまあざやかに思い浮かぶ。

話はここで終わりだ。しかし，たとえ贅言に感じられようとも，あえて反省的な感懐を述べないと納まりが悪いように思える。フィクションの営みをナイーブな意識のまま置き去りにはできないからだ。

では，どうするか。この文の冒頭のネルーダの戒めの祈りをそっと呼び戻しておきたい。

「わたしがでっちあげをやらないように，神よ，守ってください」

ところで，あの小さな赤蜘蛛だが，吉兆となることもなく，逃げ去ったまま見つからない。本から本へと渡り歩き，どこかで行き惑っているにちがいない。

［完］

執筆者について——

中村邦生（なかむらくにお）　1946年生まれ。小説家。小社刊行の主な小説に，『チェーホフの夜』（2009年），『転落譚』（2011年），主な批評に，『未完の小島信夫』（共著，2009年），『『罪と罰』をどう読むか』（共著，2016年）などがある。